

論 説

新しい金貸資本的形式と負債を伴う資本の一般的定式

佐 藤 隆

目次

はじめに：利子生み資本をめぐる混乱と本稿の目的

1. 新しい金貸資本的形式

1.1 マルクスの利子生み資本と宇野の金貸資本的形式

1.1.1 マルクスによる利子生み資本の定式化

1.1.2 宇野による修正

1.2 宇野による金貸資本的形式の問題点

1.2.1 貨幣の所有権は貸し手に帰属するのか：貨幣使用権販売論の問題点その1

1.2.2 貸し手は即時に対価を取得しないのか：貨幣使用権販売論の問題点その2

1.3 新しい金貸資本的形式

2. 負債を伴う資本の一般的定式

2.1 負債を考えるための2つの迂回

2.1.1 タリーシステムから見る負債

2.1.2 物質収支式から見る負債

2.2 負債の生産・流通・消滅

2.2.1 負債の生産

2.2.2 負債の流通

2.2.3 負債の消滅

2.3 負債を伴う資本の一般的定式

3. 新しい金貸資本的形式と負債を伴う資本の一般的定式

おわりに：理論的拡張可能性のスケルトン

はじめに：利子生み資本をめぐる混乱と本稿の目的

「利子生み資本」は、『資本論』の中に登場する資本概念の中でも奇妙で例外的な概念規定である。『資本論』の中に登場する資本概念は、多くの場合、複数の資本概念のカップリングによって規定されている。例えば、可変資本と不変資本、流動資本と固定資本、商人資本と高利貸資本といった具合である。こうした資本のカップリングの事例は『資本論』の中に実に多く登場するものの、利子生み資本だけは、それと対応する資本概念を『資本論』の中に見いだすことができない。つまり利子生み資本はこうした概念規定の例外に見える。

『資本論』の概念規定から見れば、「利子生み資本」は、本来ならば「利潤生み資本」という概念との対比によって規定されるはずである。じっさい、大谷 (2016) は、その極めて刺激的な著作の中で、「利子生み資本」概念の出自が「利潤生み資本」との対比による可能性を指摘している。その根拠として『経済学批判要綱』の次の記述を引用している。

重要なことは、利子と利潤とが資本の二つの連関を表現しているということである。特殊的形式態としては、利子生み資本 das zinstragende Capital は、労働に対立しているのではなく、利潤生み資本 das profittragende Capital に対立している。(MEGA II/1.2 S.716)¹⁾

『資本論』には登場しないものの、利子生み資本の対比概念である「利潤生み資本」はたしかに存在する。その意味では規定通りであって奇妙な点は何もない。しかし、その後書かれた『資本論』においては、利潤生み資本という概念が消失してしまったという別の奇妙さがある。

利潤生み資本という概念が『資本論』で後景に退いていった理由は、おそらくこの語がほぼ冗語法だったからだろう。そもそも「利潤を生まない資本」という定義は well-defined でない。その意味で『資本論』は書名の通り、全編にわたって利潤を生む資本の分析であると言っても過言ではない。だから、ことさらに利潤生み資本と呼ばずとも資本と呼ばばそれで足る。後景に退いていった理由は、それが資本の定義に含まれているからだと判断できる。

利子生み資本という概念が存続した理由は、以上の推論から判断すると、利子を生むという形で利潤を獲得する資本の運動には、独自の分析が必要だと判断されたからだろう。貨幣利子は貨幣の貸借、すなわち貨幣の債権債務関係から生じる。だから、利子生み資本の分析領域は、ほぼ「金融」と外延を同じうする。利子生み資本は、金融活動を担う資本、あるいは(用語として存在しないものの)金融業資本といったものと同じである。生産活動を担う資本の分析や流通活動を担う資本の分析とともに、金融活動を担う資本の分析が独自に必要とされたのだろう。『資本論』第Ⅲ巻第5編の表題に「利子生み資本」が含まれている背景には、このような分析上の必要性があったと判断できる。

利子生み資本が論じられている『資本論』第Ⅲ巻第5編の中には、金融活動を担う資本を独自に分析するための分析道具が、良く言えば極めて豊富、悪く言えば夥しく濫立している。そこにおける「資本」の複合語には、利子生み資本をはじめ、高利貸資本、貨幣取扱資本、貸付資本、貸付可能資本、貨幣資本 Geldkapital、貨幣資本 moneyed capital、銀行資本 Bank Kapital、銀行業資本 Banking Kapital、借入資本、擬制資本など枚挙に暇がない。これは生産や流通の領域における資本概念の数と比べても格段に多い。

なぜこれほどまでに利子生み資本を巡って混乱した資本概念の濫立が生じたのか。もちろん、分析道具が豊富なのは、分析対象が複雑多岐で多種多様で千姿万態だからかもしれない。だが、これほどまでに強迫神経症的な濫立を見ると、ある種の精神分析を試みたくなる誘惑に駆られる。Žižek (1989) は強迫神経症者が直視しがたい「〈現実界〉的对象」の最も正確な定義として、「それ自体は存在せず、一連の効果の中のみ現存するが、つねに歪められ、置き換えられて現れる、一つの原因である」と述べている。²⁾ 「利子生み資本」論の分析対象も、じつはこうした「それ自体としては存在せず、一連の効果の中のみ現存する」ような対象で、その対象に肉薄

しようとするほど、その分析対象以外の何か別の概念に「つねに歪められ、置き換えられて」しまうのではないか。資本概念の濫立はこうした結果ではないか。

つまり資本概念群が濫立しているのは、「真の」分析対象の置換された歪像が濫立しているからなのではないか。それは簡単に言えば、真理を捉え損なった証拠であり結果ではないかということだ。本文でも取りあげる一例を挙げよう。『資本論』第Ⅲ巻五編では利子生み資本の運動形式に「 $G-G-W-G'-G'$ 」という表現が与えられている。『資本論』第Ⅰ巻では早くも利子生み資本と高利貸資本の概念が登場し、それに「 $G-G'$ 」という別の表現が与えられている。なぜこうした表現の濫立が起こるのか。それは、利子生み資本の「真の」運動形式を捉え損なった結果、「歪められ、置き換えられて」別の諸概念が濫立した結果ではないか。本稿の疑念は以上のようなものだ。

本稿の目的は、利子生み資本概念の再検討を通じて、新しい金貸資本的形式と負債を伴う資本の一般的定式を再構築することである。その目的を達成する手段として、利子生み資本の運動を、資本の運動形式の観点から整序することにしよう。この分析手法を採用する利点は、先に掲げた夥しく濫立する資本概念群を資本形式の観点から眺めることで、それらが何の「歪像」なのかを突き止めることができるからだ。『資本論』が資本の分析であるなら、利子生み資本の運動も資本形式の観点から首尾一貫して記述できるはずである。その結果として、濫立する資本概念群も首尾一貫した観点のもとから整序できるだろう。

本稿の構成は以下の通りである。「1. 新しい金貸資本的形式」では、利子生み資本の運動形式を論理整合的な形で新しく記述し直す。そこでの新規性は、金貸資本的形式の運動の一契機に債権を明示化する点にある。続く「2. 負債を伴う資本の一般的形式」では、資本の一般的定式の一契機として債務を明示化する。この債権債務の明示化によって、利子を生み出すことによって利潤を獲得する資本の運動の全貌が解明される。最後に結論に代えて、この分析の理論的展開の可能性を素描して終わる。

早速本論に入ろう。

1. 新しい金貸資本的形式

1.1 マルクスの利子生み資本と宇野の金貸資本的形式

1.1.1 マルクスによる利子生み資本の定式化

『資本論』第Ⅲ巻第5編において、マルクスは利子生み資本の運動形式を $G-G-W-G'-G'$ と表現している。以下ではマルクスに倣って、貸し手あるいは貨幣資本家を A、借り手あるいは機能資本家を B とおいた上で、この運動の全体を概観してみよう。最初の $G-G$ が表しているのは、A から B への貨幣の貸付である。この過程では、A から B への貨幣 G の移転 transfer あるいは支出が行われる。続く $G-W-G'$ が表しているのは、B のもとでの資本の運動である。これは『資本論』第Ⅰ巻における資本の一般的定式と同じ形式であり、利子生み資本固有の過程でないことは容易に確認できる。最後の $G'-G'$ が示しているのは、B から A への貨幣の返済、A による B の貨幣の回収である。この過程では、B から A への貨幣 G' の移転あるいは還流

Return が起こる。すなわち、B が資本の運動によって獲得した G' のうちから、A に元本と利子の合計 G' が返済される。マルクスの数値例によると、まず A は B に100ポンドスターリング (以下 £100) 支出する。平均利潤率が20%であると仮定すると、B は £120 の貨幣 G' を獲得する。ここから B は A に元本 £100 とともに、利潤 £20 のうちから利子 £5 を支払う。最終的に A は £105 を獲得してこの運動は終わる。³⁾ この全過程は、結局、次のマルクスの一文に集約される。

一定期間貨幣を手放すこと (貸付)、そして利子 (剰余価値) をともなう貨幣の回収、これが利子生み資本そのものに固有な運動形態の全体である。(MEGA II/4.2, S. 415, K., III, S. 361)⁴⁾

利子生み資本の運動形式の固有性は、したがって、貸付 $G-G$ と回収 $G'-G'$ の2つの過程にあることがわかる。以下では貸付過程 $G-G$ と回収過程 $G'-G'$ の特徴について詳しく確認していこう。

マルクスは貸付過程 $G-G$ を、一般商品の売買とは異なる独自の過程と見なしていた。貸付過程の独自性は、「資本としての貨幣が商品になる」(MEGA II/4.2, S. 415, K., III, S. 354) という規定から生ずる。貨幣 G は、A から B に手渡し B のもとで資本として機能することによって、平均利潤を生み出すことが期待される。この「資本 [として機能するもの] としての貨幣」には、商品を購入できるという通常の形式的使用価値に加え、平均利潤を生み出すことができるという追加的使用価値が付加される。この追加的使用価値が貨幣に付加されることで、貨幣には改めて商品の性格が与えられる。これにより貸し手は、商品となった「資本としての貨幣」の売り手、借り手はその買い手となる。だが、資本としての貨幣は商品になったにもかかわらず、貸し手から借り手に手渡る貸付過程では「変態のどんな行為も、購買も販売も、表していない。所有は譲り渡されない」(MEGA II/4.2, S. 420, K., III, S. 359)。すなわち、商品となったここでの「資本としての貨幣」は、売られるのではなくレンタル商品として貸される。こうして、単なる貨幣や商品としてではなく、資本として手渡されるが故に、売買とは異なる独自の範疇として貸付という形態が要請された。

マルクスが貸付を独自の過程と見なしていた理由は、貨幣の所有権が借り手 B に移るのではなく、貸し手 A に帰属すると見なしていた点に帰着する。商品となった「資本としての貨幣」は、家屋などと同じように、「売買の場合とは違って、所有者を取り替えない」(MEGA II/4.2, S. 418, K., III, S. 361)。資本としての貨幣は、その所有は譲り渡されない。それはしたがって、商品としての規定を被っても販売されてしまうことはない。購買と販売からなる $G-W-G'$ の過程のような「資本の現実の運動」(MEGA II/4.2, S. 420, K., III, S. 360) の「内在的形態」(MEGA II/4.2, S. 422, K., III, S. 362) とは異なり、 $G-G$ は「法律上の取引」(MEGA II/4.2, S. 422, K., III, S. 362) という「外面的な姿態」(MEGA II/4.2, S. 421, K., III, S. 360) に過ぎない。それは「ある期間を限っての貨幣の手放し」という特有な譲渡の形態をもっている。以上の点が、マルクスをして貸付を独自の過程と規定せしめた特徴である。この特有の形態は、回収過程 $G'-G'$ においても同種の独自性をもたらすことになる。

マルクスは回収過程 $G'-G'$ を、「資本としての貨幣」の追加的使用価値の実現により借り手 B に取得された利潤の一部が、一定期間後、利子という形態で貸し手 A に還流する過程と捉え

ていた。普通の販売過程では、商品の使用価値は移転するが価値は移転せず、価値は商品から貨幣にその姿態を変える。これに対し貸付の過程では、資本としての貨幣は、その追加的使用価値が移転するとともに、一定期間は価値も移転する。これは商品販売の場合のように即時的には対価を受け取らないことを意味する。A が対価 G' を受け取るのは一定期間を経た後のことであり、 G' は回収過程において元本に利子を加えて A に復帰する。ここでは「売ることが貸すことに転化し、価格が剰余利潤の分け前に転化してしまっている」(MEGA II/4.2, S. 420, K., III, S. 359)。

マルクスが回収過程を独自の過程とみなしていた理由は、売買のように所有権の譲渡が同時に行われるのではなく、対価の取得が一定期間後に生ずると見なしていた点に帰着する。これは言い換えれば、回収過程では、貸し手は貨幣を引き渡した時点で対価を受け取らない、ということもできる。これは貸付が販売とは違うことから派生する当然の帰結である。

以上、マルクスが貸付 $G-G$ と回収 $G'-G'$ を独自の過程と考えていた理由を整理すると、貸付過程では A が貨幣の所有権を放棄することなく B に貨幣を引き渡すという貸付命題、回収過程では引き渡した時点で A は対価を受け取らない (一定期間後に元本と利子を回収する) という回収命題の 2 つの独自性命題に集約することができる。この 2 つの命題は、販売・購買とは異なる貸付・回収の特徴を示すと同時に、現実の資本の運動とは異なる特徴を新たに利子生み資本の運動全体に付け加えることになった。だがしかし、この利子生み資本の運動形式 $G-G-W-G'-G'$ がそもそも資本の運動を表現しているのかどうかを疑った論者がいる。私たちが言及しているのは、もちろん宇野弘蔵である。

1.1.2 宇野による修正

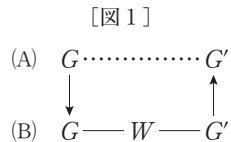
宇野弘蔵が事実上指摘した点は、利子生み資本の運動形式 $G-G-W-G'-G'$ における貸付過程 $G-G$ と回収過程 $G'-G'$ は資本の運動ではないということだ。この指摘には宇野が資本の運動をどのように認識していたかがよく現れている。通常の「商品、貨幣の形態は生産物が人々の手をかえるという、いわば空間的運動の『形態』である」。しかるに「資本は、生産物の商品、貨幣の形態を前提としながら、それらの運動を前提としながら、それらの運動を基礎として、いわゆる『変態』をなす、いわば『時間的な運動』の形態である」(宇野 (1962), p. 143)。商品や貨幣の運動は、姿を変えないで持ち手を変える。他方の資本の運動は、宇野自身が言い換えているように「持ち手を変えないで、その姿を商品、貨幣と変える」(宇野 (1959), p. 323)。あるいは、「資本は元来それ自体が取引の対象となるべきものではないのである。取引の対象となるには商品なり貨幣なりの形態を採らなければならない」(宇野 (1948), p. 221)。つまりは、商品流通は持ち手変換、資本の運動は姿態変換によって特徴付けられる⁶⁾。この宇野の観点からすれば、貸付過程 $G-G$ と回収過程 $G'-G'$ が事実上資本の運動ではないのは、定義から導き出される当然の帰結だった。

貸付過程 $G-G$ と回収過程 $G'-G'$ は、資本の運動を表す姿態変換ではなく、貸し手 A と借り手 B との間の持ち手変換である。最初の G と最後の G' は、貸し手 A の手元であり、 $G-W-G'$ は借り手の手元にある。1 つの資本形式の中に 2 つの異なる持ち手が混在している。これは 2 つの異なる運動が 1 つの運動形式の中に混在していることを意味している。A と B との間の運動は移転 transfer、B のもとでの商品と貨幣との運動は転化 transformation ないしは変態 metamorphose である。宇野は資本の運動の要件を姿態変換と捉えた結果、移転を資本の運動か

ら除外することになった。

それでは、利子生み資本の運動形式は正しくはどのような形式なのだろうか。

宇野の修正案によれば、利子生み資本の運動形式は、貸し手 A による金貸資本的形式と借り手 B による資本の一般的定式との混淆である。それは図 1 によって示される。



利子生み資本の運動形式は図 1 のように修正され、新たに 2 つの記号、すなわち AB 間の移転を示す上下方向の矢印と A のもとでの金貸資本的形式の過程を示す点線が導入された。1 点目、上下方向の矢印記号「↓」「↑」は、貸付過程 $G-G$ と回収過程 $G'-G'$ を示すのに用いられている。矢印記号は、宇野 (1950-52) 以降何の断りもなく導入されている記号ではあるが、文脈から判断して場所変換あるいは持ち手変換を表す記号である。2 点目、点線記号「…」は A のもとでの資本の運動である金貸資本的形式の運動形式を示すために用いられている。すなわち、始点 G と終点 G' が直接点線で結ばれた結果、A のもとでの資本の運動は $G \cdots G'$ という表現を得るに至った。これは、資本の一般的定式の「簡潔体」としてマルクスが利子生み資本を表現した $G-G'$ とほぼ同じ表現であるが、金貸資本的形式は「単なる流過程にあるものとはいえない」(宇野 (1959), p. 172) という理由で点線が採用されている。この記号に積極的な定義は与えられていないが、消極的には「流過程以外の資本の運動過程」を示しており、それは例えば、金貸資本的形式の過程や、それ以外では生産過程を示す記号として用いられている。

以上により、利子生み資本の運動形式は、AB 間の運動と、各 A, B のもとでの運動とに明確に区別された。すなわち利子生み資本の運動形式は、主体間の持ち手変換運動と主体内の資本の姿態変換運動に分解され、かつ利子生み資本の運動全体は、金貸資本的形式と資本の一般的定式の 2 つの運動に分節化された。

この修正以降、宇野あるいは宇野派の中で「利子生み資本」概念は、概念として現れこそすれ、それに対して $G-G-W-G'-G'$ という表現が与えられることはまったくなくなった。その代わりに、利子生み資本の資本形式としてはもっぱら金貸資本的形式 $G \cdots G'$ が用いられた。問題の焦点は、金貸資本的形式 $G \cdots G'$ が正しく資本の運動を記述している形式かどうかという点に移っていくことになる。

1.2 宇野による金貸資本的形式の問題点

1.2.1 貨幣の所有権は貸し手に帰属するのか：貨幣使用権販売論の問題点その 1

宇野は、貸付過程 $G-G$ と回収過程 $G'-G'$ を資本の運動から排除した結果、マルクスの「資本としての貨幣が商品になる」という規定を放棄した。マルクスにあっては資本としての貨幣の移転 transfer は資本として移動するので、資本の運動形式の一環であることは言を俟たない。しかし、宇野にあっては「資本は A から B の手に移るといような形で運動するものではない」

(宇野 (1959), p.190)。したがって AB 間で取引されているものは資本ではない。ではそこでは何が取引されているのだろうか？

宇野は、新たに「資金としての貨幣」という概念を導入し、貸付過程を「資金としての貨幣を一定期間の使用の売買として貸し付けるもの」(宇野 (1959), p.193) と考えた。ここで資金とは蓄蔵貨幣の一種であるが、蓄蔵貨幣が必ずしも流通過程に復帰することを目的としていないのに対し、「流通過程への復帰の方向をとっている場合、貨幣は資金となる」(宇野 (1959), p.187) と定義される。別のところで宇野は「住宅や船舶等の貸借と同様」, 「貨幣そのものが売られるのではない、貨幣の一定期間の使用権が売られるのである」と明言している (宇野 (1948), p.219)。貸付過程をマルクスは「資本としての貨幣」の移転 transfer と捉えたのに対し、宇野は「資金としての貨幣」すなわち貨幣の一定期間の使用権の売買 exchange と捉えたことがわかる。

ここで興味深いのは、マルクスと宇野の間には「資本」と「資金」という分析道具の相違があるにもかかわらず、貸付と回収の独自性命題についてはほぼ意見が一致していたということである。1点目、マルクスも宇野も、ともに貨幣の所有権は継続的に貸し手 A にあると考えていた。ただし、その理由は両者で異なる。マルクスの場合は、貨幣としての資本は販売されずに貸し付けられるため、貨幣の所有権は A に帰属する。宇野の場合は、貨幣そのものが売られるのではなく、貨幣の一定期間の使用権が売られるため貨幣の所有権は A に帰属する。2点目、マルクスも宇野も、A が B に貨幣を引き渡した時点では A は対価を取得しないと考えていた。だがやはりその理由は異なる。マルクスにあっては、貨幣が A から B に移転する過程も B から A に還流する過程も資本の運動であり、当然ながらその間、つまり移転から還流までの一定期間も資本の運動である。この「資本の現実の運動」、すなわち利潤を生み出す追加的使用価値が実現するには、時間がかかる。よって理由は、借り手 B のもとで資本の現実の運動に時間がかかるからだ。宇野の場合は、A によって売られるものがそもそも「貨幣の一定期間の使用権」である。よって理由は、一定期間後でない「貨幣の一定期間の使用権」という商品の引き渡し完了しないからだ。両者は違った分析道具で同じ特徴を導き出した。マルクスが見いだした独自の特徴はそのまま宇野にも引き継がれた。要するに宇野は、貸付と回収の2つの過程を資本の運動と区別し、姿態変換の観点から資本の運動の分析を首尾一貫させながらも、その特徴についてはマルクスと同じ結論を導出することに成功したわけだ。

だが果たしてそうか。

仔細に見ると、貸付過程の1つ目の特徴である貨幣 G の所有権は貸し手 A に帰属するという命題と、宇野の道具立てである資金概念とは、両立しがたい。このことを説明するために、まず貨幣と資金を記号の上で区別しよう。⁸⁾ 貨幣を G としたとき、その一定期間の使用権 right to use を $u(G)$ と表記する。マルクスの数値例では、A の当初所有する貨幣は £100 だったから $G = 100$ 、利子 £15 は一定期間の使用権に対する対価なので、 $u(G)$ の価格を g とすると $g = 15$ となる。なお、これに加えて以下では、借り手 B は当初は一文無しで何も資産を保有していないと仮定する。以上を踏まえて検討に移ろう。

結論を先取りして言えば、貸付後の貨幣 G の所有権は、借り手 B に帰属する。このことを背理法風に説明してみよう。かりに貸付後、£100 の貨幣 G の所有権が A に帰属すると仮定する。仮定より、貸付後の貨幣 G の所有権は A に帰属するから貨幣 G は B に販売されず、代わりに

一定期間の使用権 $u(G)$ が販売される。B が使用権 $u(G)$ を購入した理由は商品 W を購入するためだから、B は使用権 $u(G)$ を行使し、例えば第三者の C から商品 W を購入する。C は W を売って £100 の G を手に入れる。このとき、 G の所有権は W を販売した C に帰属する（市場経済でこれ以上自明なことは少ない）。この時点で誰かに所有されている貨幣存在量を数えてみると、A の所有する G が £100、C の所有する貨幣 G が £100、合計 £200 になる。しかるに貨幣の初期保有量は A が 100、B が 0、C が 0、合計 £100 だったはずであるから、これは矛盾。この矛盾が生じた理由は、正当に所有されている C の貨幣 G だけでなく、貨幣 G の所有権が A に帰属すると仮定した結果、さらに 100 を数える ^{ダブルカウント} 二重計測が生じたからだ。よって、マルクス = 宇野の貸付命題は成り立たず、代わりに「貸付後の貨幣 G の所有権は、借り手 B に帰属する」という新たな貸付命題が成立する。⁹⁾

1.2.2 貸し手は即時に対価を取得しないのか：貨幣使用権販売論の問題点その2

貸付後の貨幣 G の所有権が貸し手 A に帰属するという貸付の独自性命題が崩れると、その影響は 2 つ目の命題、すなわち貸し手 A が借り手 B に貨幣を引き渡した時点では A は対価を取得しないという回収の独自性命題にも影響を及ぼさずにはいられない。ただし、生じかねない誤解の芽をここで予め摘んでおこう。それは、借り手 B が $u(G)$ を取得し、貸し手 A が一定期間後に利子 g を取得する、という論理そのものには、ここでは何ら反対していないということだ。たしかに借り手は貨幣の使用権を取得する。だがそれは、借り手が貨幣の所有権を取得した結果、使用権を取得するに過ぎない。たしかに貸し手は利子を一定期間後に取得する。問題の焦点は、一定期間中のこと、すなわち A が B に貨幣 G を引き渡した時点から利子を取得するまでの間に、A は B から対価を取得するかどうかである。

実のところ、貸し手 A が借り手 B に貨幣 G を引き渡した時点で、A は B から何らかの対価を取得する。ふたたび背理法風に説明してみよう。かりに A が B に貨幣 G を引き渡した時点では A は B から対価を取得しないと仮定する。仮定より、対価である元本と利子を A が B から回収できるのは一定期間後のことである。この一定期間、すなわち A が B に貸付後 G の所有権を譲渡してから元本と利子を回収するまでの間、すでに証明したとおり、A は貨幣 G の所有権を譲渡しているため、一切の所有権を持たない。このため、A のもとでの資本の運動は、強いて言えば、 $G \cdots 0 \cdots G'$ となる。このことが意味しているのは、A の貨幣 G が譲渡された結果、それとともに資本そのものも譲渡され、資本が一定期間なくなってしまうということである。しかるに、資本は譲渡されることはなく、ましてや資本がなくなってしまうことはない。これは矛盾。よって A が B に貨幣 G を引き渡した時点で、A は B から何らかの対価を取得するはずである。ではその対価とは何か。

貨幣 G を引き渡した結果、貸し手 A が借り手 B から何を取得するかについて宇野は何も語らないが、マルクスが別の個所で模範解答を先取りしている。マルクスは、貸し付けられる前の「貨幣資本 moneyed capital は常に貨幣の形態で存在する」ことを確認した上で、貸し付けられた後の事態について次のように述べている。

のちには貨幣請求権 claim upon money として存在する。というのは、その最初の存在形態である貨幣は、貸し付けられれば、今では、資本の現実の貨幣形態、貨幣資本として機

能するのは、借り手の手の中だからである。貸し手にとっては、それは貨幣請求権 claim upon money に、あるいは、所有権限に、転化して verwandelt しまっている。(MEGA II/4.2, S. 588, K., III, S. 526)

すなわち、貸し手 A が借り手 B に貨幣 G を引き渡して取得する対価は、貨幣請求権である。マルクスは貨幣請求権について定義を与えていないが、簡単に言えばそれは、A が B に対して、貨幣の移転を一定期間後に請求できるという権利である。¹⁰⁾ここから新たに貸付過程の定義と特徴を述べることができる。

1.3 新しい金貸資本的形式

貸付過程とは、貸し手 A が貨幣を譲渡し、その対価として借り手 B から貨幣請求権を取得する過程である。この結果、貸し手 A のもとで、資本は貨幣から貨幣請求権に姿態変換する。マルクス自身、信用販売について言及している個所では、商品から貨幣請求権に転化することを認めている。¹¹⁾宇野自身はともかく、こう考えた宇野派内外の論者もいる。¹²⁾貸付を、貨幣から貨幣請求権への転化と考えれば、回収命題の代わりに、「A が B に貨幣 G を引き渡した時点で、A が B から取得する対価は貨幣請求権である」という新たな回収命題を打ち立てることができよう。

貸付過程において A の手で貨幣が貨幣請求権に姿態変換することを考慮に入れると、貸付過程は、商品化された貨幣請求権の購買過程と見なすことができる。つまり貸付過程において A が B に貨幣 G を貸すということは、A が B から商品化された貨幣請求権を貨幣 G で購買することと同一視できる。¹³⁾じっさい、貨幣請求権は、使用価値と価値をもつ商品である。貨幣請求権には、一定期間後 B に貨幣の移転を請求できるという使用価値がある。それは、(貨幣請求権が券面化された証書の場合には)紙の使用価値とは異なる、まさに利潤ならざる利子を生み出す追加的使用価値であると言ってよいだろう。では価値はどうだろうか。少なくともマルクスならば自己価値はないが価値はあると言っただろう。¹⁴⁾マルクスは一方で、「紙券 Papier」から成る「金にたいするたんなる支払指図」(つまり券面化された貨幣請求権)は「けっして自己価値 Selbstwerthe ではない」と形容すると同時に、他方で「紙券が表している、資本の貨幣価値は」「現実の資本の価値からは離れて調整される」と指摘している (MEGA II/4.2, S. 525, K., III, S. 487)。つまり現実の資本の自己価値とは違った論理で、紙券が表している資本の貨幣価値が調整されると考えていた。それは、「まるで積み荷証券が、積み荷とは別個に、また積み荷と同時に、ある価値を与えられるかのように」(MEGA II/4.2, S. 530, K., III, S. 494)、貨幣請求権は貨幣とは別個に価値を与えられる。貨幣請求権が使用価値と価値をもつ商品と見なしうる以上、A にとって貸付過程は、商品化された貨幣請求権の購買過程と考えることができるだろう。¹⁵⁾商品化された貨幣請求権を一括して金融資産 Financial asset と呼ぶこともできるが、¹⁶⁾以下ではそれを、金融資産よりも内包の小さい金銭債権 (さらに簡略化して単に債権) と呼び、記号で F とおくことにしよう。

貸付過程とは債権 F の購買過程 $G-F$ と捉えることができる。では、回収過程はどうか。回収過程を債権の販売過程と捉えることはできるだろうか。

貸付過程を債権 F の購買過程と捉えることができるからといって、回収過程を F の販売過程と捉えることはできない。かりに回収過程を債権の販売過程 $F-G$ だと仮定してみよう。仮定よ

り、回収を行う貸し手 A は債権 F を販売しようとし、返済を行う借り手 B は貨幣 G で購買しようとするはずである。しかし、債権 F は借り手 B にとって使用価値をもたない。というのも、 F は定義上 B に対して貨幣の移転を請求できる権利だから、B に対する貨幣請求権を B が購買しても、B は B に (つまり自分が自分に) 貨幣の移転を請求する羽目になる (できることはせいぜい右のポケットから左のポケットに貨幣を移すことでしかない)。つまり B にとって F は使用価値がない。A からみれば、 F には他人 B のための使用価値がない。他人のための使用価値のないものは商品ではないから、A は B に対して商品を販売しているわけではない。したがって、回収過程は債権 F の販売過程と見なすことはできない。では回収過程とはどのような過程だろうか。

回収過程は、 $F \cdots G'$ と表現するのが妥当であるような、債権 F の消費過程である。なぜ消費過程と捉えることができるのか、その理由はほぼ消費の定義にしたがう。商品の「使用価値は、使用や消費においてのみ実現される」(MEGA II/10, S. 64, K., I, S. 50)。ここでの商品は債権 F であり、その使用価値は B に貨幣の移転を請求できることである。したがって、請求が実現され貨幣の移転が実際に起こるのは、その消費過程においてである。よって、債権 F の使用価値の消費が B の貨幣を A に移転させる。以上の貸付・回収過程の推論を踏まえると、金貸資本的形式がどのような形式を持つかが明示できる。

金貸資本的形式とは、貸付過程 $G-F$ において貨幣 G で債権 F を購買し、回収過程 $F \cdots G'$ において債権 F を消費することで元本および利子 G' を得る過程の総体である。金貸資本的形式とは、言わば、安く買って高く回収する運動だ。

金貸資本的形式は次のように書ける。

$$G-F \cdots G'$$

この過程は一見すると商人資本的形式 $G-W-G'$ とよく似ているものの、回収過程が販売過程ではないという点で独自の過程である。もしも A が一定期間の経過を待たずに債権 F を第三者に売るのであれば、それは $G-F-G'$ となり商人資本的形式と一致する (このときはもちろん両者を区別する必要はない)。しかし、商人資本的形式が購買と販売の組み合わせによる資本形式であるのに対し、金貸資本的形式は購買と消費の組み合わせによる資本形式である点が決定的に異なる。¹⁷⁾ したがって、金貸資本的形式は一個独立した資本形式である。

新しい金貸資本的形式を定式化し終えた今、今度は負債の一般的定式について考えてみよう。

2. 負債を伴う資本の一般的定式

2.1 負債を考えるための2つの迂回

一見すると、貸付過程が貸し手 A による債権の購買過程 $G-F$ だから、借入過程は借り手 B による債権の販売過程 $F-G$ に見える。じっさい、貨幣 G 所有者と商品 W 所有者との間の取引は、貨幣所有者による購買過程 $G-W$ と商品所有者による販売過程 $W-G$ によって記述される。この商品 W が債権という商品 F に置き換わっただけだと考えれば、借入過程は債権の販売過程 $F-G$ のように見える。¹⁸⁾

だが、借入過程が債権 F の販売であるかどうかは一見するほど自明ではない。というのも、 B は貨幣を請求される側の債務者だから、債権 F を持つてはいないはずである (保有していたら債権者のはずだ)。しかるに、借り手 B が持っているのは、請求に対する応諾義務、つまり債務である。よって、借り手 B は貸し手 A に対する債権 F をそもそも持つてはいないはずである。

なぜ債務者側である借り手 B が、そもそも持つていないはずのない債権 F を販売できたのかを明らかにするために、債権と債務を記号の上で区別して、債務を表す記号を (少々こねない感はあるが) $-^T F$ と表記することにしよう。まず、マイナスの符号がついている理由は、誰かの貸しは誰かの借りであり、債権と債務の集計値が 0 となるよう債務を定義しているためである。誰かに対して貸し 1 、誰かから借り 1 があつたとき、その合計は 0 であつて 2 ではない。これは暗黙のうちに、誰かの借り 1 をマイナスと定義しているからだ。また、 F の左上添字に「 T 」がついている理由は、貸借対照表に表記の上で似せるためだ。金銭債務は T 型勘定の貸方に (右側) 記載される勘定項目である。そこで「 T 」の右 (貸方) 側に F が来るように配置すれば、貸借対照表に通じている読者であれば債務であることは容易に想像がつく。ここでは $-^T F$ という記号を採用するが、これにこだわるものではない。

借り手は債務 $-^T F$ しか保有していないにもかかわらず、どのように保有してもいない債権 F を売るのか、以下ではこのパラドックスに取り組むべく、債権債務関係がどのようにして生ずるかを歴史的に迂回してみよう。時は中世、場所はイングランド、私たちが言及するのは古い時代の債権債務システムである、タリーシステム tally system である。¹⁹⁾

2.1.1 タリーシステムから見る負債

ここで言及するタリーシステム tally system とは、中世イングランドで使用された債権債務関係を記録する会計システムのことで、12世紀から19世紀にかけて用いられてきた。このシステムの特徴は、タリー tally と呼ばれる木製の棒を使って取引や負債を記録していた点である。例えば、イングランド財務府 Exchequer が市中から借り入れるためにタリーを作成する場合を考えてみよう。この場合、市中の豪商や王侯貴族が債権者、タリーを作成する財務府は債務者である。具体的には、債務者である財務府が市中の債権者と合意した一定の金額を表す刻み目 notches をタリーに彫り込み、それを縦に二つに (ちょうど割り箸を割り損なって長い側と短い側ができるように) 割る。債権者が債務者に対して刻み目通りの金額を渡すと、債務者は債権者に stock と呼ばれる長い側を手渡し、債務者は foil と呼ばれる短い側を保管する。つまりタリーの長い側は債権を表し、短い側は債務を表している。長短に分有されたタリーは、細かな木目がパズルのようにぴたりと合うよう精巧に作られているおかげで、偽造や改竄を防ぐことができた。²⁰⁾ そして返済が行われると、長短のタリーが一致することで支払金額の確認が行われ、タリーは破棄または処分された。最終的にはタリーシステムは1826年に廃止され、紙に置き換わることになった。1834年10月16日、国会議事堂であるウェストミンスター宮殿内のストーブでタリーを焼却処分していた際の失火により国会議事堂の大半が焼失し、その大火によって財務府に保管されていたタリーは灰になってしまった。現存しているのは債権者側の Stock がほとんどである。²¹⁾

タリーシステムは、本義的には債権債務を記録する会計システムであるが、それをあたかも債権債務それ自体の生産・流通・消滅と同一視することもできる。もちろん、タリーそのものは単なる木片に過ぎない。ここでの木片はあくまで債権債務を指し示す記号表現の素材である。だが、

この記号表現の素材と、この記号表現が指し示す債権債務の記号内容とを同一視して、木片の作成と債権債務という権利義務の作成とを同一視しても構わない。逆に、債権債務関係という目に見えない社会関係を、物質的に操作可能な、目に見える素材として社会関係を表象しているのがタリーだと考えればよい。木片としてのタリーを製作する過程では、タリーに金額を刻み、2つに分割して、債権側 stock と債務側 foil を作成する。この作成過程を、あたかも債権と債務という社会関係そのものを作成する過程と捉えることができる。流通部面では、債権者が債務者へと貨幣を手渡すと同時に、債務者が債権者に stock を手渡し、foil を保管する。この過程も同様に、債務者が債権者に請求権を譲渡し、債務者に負債があることを証する過程と捉えることができる。消滅あるいは償却（むしろ文字通りには焼却と言うべき）部面では、債務者が借金を返済すると、金額確認のため債権者の stock が債務者に戻され、返済が確認されると破棄される。この部面も、債務の弁済によって債権債務が消滅する過程と捉えることができるだろう。

このタリーの生産・流通・消滅が、貸し手と借り手の間の貨幣請求権の売買を解釈する重要な手がかりを与えてくれるのだが、それを語る前にもう1つだけ迂回しておかなければならない。今度は中世イングランドから化学工学の分野にまで話を飛躍させる必要がある。

2.1.2 物質収支式から見る負債

いささか唐突な感はあるが、化学工学の分野で用いられる物質収支 material balance の考え方を使得、ストックとフローの違いについて確認しておこう²²⁾。時点 t_1 から t_2 の間の期間（ここでは期間の長さを1に正規化する）にかけて、あるシステムにおいて物質量が変化するという事態は、次のように記述できる。

$$\begin{aligned} & (t_1 \text{ から } t_2 \text{ 期間の}) \text{ 変化量} = t_2 \text{ 時点の存在量} - t_1 \text{ 時点の存在量} \\ & = + \text{期間流入量} - \text{期間流出量} + \text{期間発生量} - \text{期間消滅量} \quad \dots\dots(1) \end{aligned}$$

物質収支の考え方によれば、ストックの変化は、フローの増加とフローの減少とのギャップにより生ずる。式(1)の用語では、ストックの変化が2時点間の存在量の変化量、フローの増加は流入量と発生量、フローの減少は流出量と消滅量である。これは経済学でよく用いられるバスタブの比喩と基本的には同じである。すなわちバスタブの水量の変化は、蛇口からの流入量と排水口からの流出量との差に等しい。(1)式には、システム内外との間の収支である流出量に加えて、化学工学で言う発生量と消滅量、経済学で言う生産量と消費量というシステム内部の収支が加わっているが、本質的には何も変わらない。この表現をより数学的に表現するために、少しだけ記号を宛がっておく。物質収支式の物質の存在量を X 、その変化量を ΔX 、当該期間の流入量を x^+ 、発生量を x^\oplus 、流出量を x^- 、と消滅量を x^\ominus と書く。つまり、存在量を大文字、変化量を小文字、増加要因を上付き添字のプラス記号、減少要因を上付き添字のマイナス記号で書くとする。すると次式が成り立つ。

$$\Delta X = +x^+ - x^- + x^\oplus - x^\ominus \quad \dots\dots(2)$$

ストックの変化はフローの増減の差に等しいことを示す(2)式を、単に物質収支式と呼ぼう。この物質収支式は、あるシステムが時間を通じてその存在量を変化させるときに必ず満たさなければならない条件を記述している。ということは、この式は経済学における存在量全般にも当ては

まるはずである。

資産については、物質収支式をそのまま何の問題もなく当てはめることができる。資本循環中に登場する貨幣や商品、そしてもちろん債権にも物質収支のルールが当てはまる。債権については、式(2)と同様のルールで記述すると、次のような式(3)になるだろう。

$$\Delta F = +f^+ - f^- + f^\oplus - f^\ominus \quad \dots\dots(3)$$

負債についても、物質収支式をそのままではないにせよ、当てはめることができる。ただし、負債はマイナス量で定義されねばならないから、その点のみ修正を要する。負債は次のような式(4)で記述できる。

$$-\Delta^T F = +^T f^+ - ^T f^- + ^T f^\oplus - ^T f^\ominus \quad \dots\dots(4)$$

すなわち、マイナス量である負債の変化量は、フローの流入・流出・発生・消滅を通じて変化する。式(3)と異なる点はただ1点、負債 $-\Delta^T F$ がマイナス量で定義されているため、その変化量 $-\Delta^T F$ にもマイナスがついて定義されている点だけである。

この物質収支式をタリーシステムと繋げて考えると、負債の増減について厳密に考えることができる。

2.2 負債の生産・流通・消滅

マイナス量で定義された物質収支式とタリーシステムとを通じて、負債の生産・流通・消滅を記述してみよう。そのためここでは再びマルクスの数値例を拝借する。まず、当初は一文無しであった借り手 B が £100 を借りる。その貨幣で商品を £100 購買し、£120 で販売する。得られた売上の中から、元本と利子あわせて £105 を A に返済する。

2.2.1 負債の生産

まず、借り手 B は £100 を借りるため、あたかもタリーを生産するかのように債権債務関係を「生産」する。すなわちタリーで言えば、債権を意味する stock と債務を意味する foil の2つに分割されるタリーを作成する。マイナスの物質収支式(4)を用いると、この過程は次のように表せる。

$$-\Delta^T F = +^T f^\oplus - ^T f^\ominus = +100 - 100 \equiv 0 \quad \dots\dots(5)$$

したがって、次式(5')が成り立つ。

$$^T f^\oplus \equiv ^T f^\ominus \quad \dots\dots(5')$$

すなわち、タリーの債権側 stock を物質収支式の発生量 $^T f^\oplus = 100$ 、債務側 foil を物質収支式の消滅量 $-\Delta^T F = -100$ に対応させ、結果的に負債そのものは変化しない、すなわち恒等的に $-\Delta^T F \equiv 0$ と解釈する(無一文の仮定により $^T F = 0$ である)。債権をプラス、債務をマイナスで定義したから、 $+^T f^\oplus$ が債権側、 $-\Delta^T F$ が債務側であることは言を俟たない。ここで重要なのは、この式(5)または(5')が恒等的に0になるという点だ。これはタリーシステムで考えれば、債権側と債務側に記載されている情報が(たまたまではなく)恒等的に一致していることを意味している。

一致していなければ、タリーのどちらかに毀損や改竄があったことを意味しているから、両者は必ず一致していなければならない。また、債権と債務が同額存在するということは、自分が自分に対して債権と債務を同時に同額保持している状態だとも解釈できる。自分が自分から取り立てても何も変化しない。右のポケットから左のポケットに財布を移しても、何も増えないし何も減らないということだ。

この過程をいささか強引に、債務を投入、債権を産出とする生産過程と考えることもできる。いや、より正確には、「債務を負担する」という行為を「マイナス量である債務を生産する」、つまり「債務を生産的に消費する」行為と捉え、その結果、貨幣請求権という「債権を生産する」過程と捉えることができるだろう。債務を負担した分だけ債権は発生するから、債務の生産的消費と債権の生産が同額発生することになる。

2.2.2 負債の流通

次に、借り手 B は £100 を実際に借り入れるべく、あたかもタリーを流通させるかのように債権を「流通」させる。A から B に貨幣が手渡るとき、タリーシステムでは債権側 stock が債権者の手に渡り、債務側 foil が債務者の手に残ることで債権債務関係を記述していた。この借り手 B における債権債務関係をマイナスの物質収支式で記述すると次のようになる。

$$-\Delta^T F = +{}^T f^\oplus - {}^T f^\ominus - {}^T f^- = -{}^T f^\ominus = -100 \quad \dots\dots(6)$$

ただし(6)式が成り立つのは次の恒等式が成り立っているおかげである。

$${}^T f^\oplus \equiv {}^T f^- \quad \dots\dots(7)$$

タリーを流通させるとは、タリーの債権側 stock を債権者に手渡すことを意味するから、これは借り手 B が生産した債権を債権者側に引き渡すことを意味する。すなわち、生産した債権 $+{}^T f^\oplus$ の分だけ流出 $-{}^T f^- = -100$ が生じ、結果的に負債そのものは $-\Delta^T F = -{}^T f^\ominus = -100$ となる(無一文の仮定により $-{}^T F = -100$ となる)。借り手が作成した債権 $+{}^T f^\oplus$ は、元の情報を保存したまま(情報の毀損や改竄が生じることなく)恒等的に貸し手に譲渡 $-{}^T f^-$ される。つまり、債権 $+{}^T f^\oplus$ の流出 $-{}^T f^-$ によって負債の絶対額 $-\Delta^T F$ は増える²⁴⁾。このことは2つの恒等式(5)と(7)から明らかである。すなわち、 ${}^T f^\oplus \equiv {}^T f^\ominus$ かつ ${}^T f^\oplus \equiv {}^T f^-$ より、 ${}^T f^- \equiv {}^T f^\ominus$ が成り立つ。これは債務者が債務の生産的消費 $-{}^T f^\ominus$ によって生産した債権 ${}^T f^\oplus$ を、そのまま債権者側に譲渡 $-{}^T f^-$ しているというごく普通の(生産されたものが流通するという)解釈と、負債は債権を手渡した ${}^T f^-$ 分だけ絶対量が ${}^T f^\ominus$ が増えるというやや逆説的な(渡した分だけ絶対量が増えるという)解釈とが一致していることを意味している。

債権を受け取る貸し手 A の側から見れば、借り手 B から手渡される債権は、取りも直さず貸し手 A の受け取る債権と恒等的に等しい。つまり次の恒等式が成り立つ。

$${}^T f^- \equiv f^+ \quad \dots\dots(8)$$

ここで f^+ は、債権者側の物質収支式における債権の流入量である。すなわち、借り手から流出した債権は、正確に貸し手の手元に流入する²⁵⁾。式(7)と(8)より ${}^T f^\oplus \equiv {}^T f^- \equiv f^+$ が成り立つから、生産した債権 ${}^T f^\oplus$ をそのまま借り手が譲渡 ${}^T f^-$ し、借り手がそのまま受納 f^+ することがわかる。

BからAに債権が手渡ると同時に、AからBに貨幣Gが手渡る。当初Bは無一文であって、 $-{}^T F=0$ であった。いまや債権の生産と流通の結果、 $G=100$ へと変化する。もちろん、負債額はこのとき $-{}^T F=-100$ であるから、純資産は $G-{}^T F=0$ であってプラスマイナスゼロである。とはいえBは、債務負担 $-{}^T F$ によって貨幣Gを取得したことになる。

以上より、借入過程は $-{}^T F-G$ と記述できることがわかる。債権債務の生産過程では、債務 $-{}^T f^\ominus$ が生産的に消費され債権 $+{}^T f^\oplus$ が生産される。流過程では、生産された債権 $+{}^T f^\oplus$ が、BからAへの流出分 ${}^T f^-$ として手渡される。その対価として貨幣GがAからBに手渡る。流過程で債権が手渡されることによって、債務 $-{}^T F$ から貨幣Gへと姿態変換したと考えることができる。借入過程 $-{}^T F-G$ はしたがって、債権を販売して対価の貨幣を取得する、債権の販売過程と考えることができるだろう。

これにより、Fを持っていない借り手が、どうやって持ってもいないFを売ることかというパラドックスに答えることができる。それはもちろん、借り手は債務負担をすることを通じて債権を生産し、それを販売しているからである。債権を保持していないように見えるのは、債権を生産する際に同額の債務を負担するためにプラスマイナスゼロとなって、何も持っていないように見えるからである。たしかに、借り手は負債 $-{}^T F$ そのものを販売しているのではない(そもそも無一文の仮定により負債すら持ち合わせていない)。しかし、借り手はプラスの債権とマイナスの債務を同時に生み出し、プラスの債権を販売する。債権を販売して貨幣を取得すると同時に、残存するマイナスの債務が負債 $-{}^T F$ を事後的に存在せしめるのである。こうして借り手は無袖を振る。借り手のもとで、無から有が生み出されたわけだ。

2.2.3 負債の消滅

借入過程 $-{}^T F-G$ が貸付過程 $G-F$ と相補的に記述できた今、返済過程も回収過程 $F\cdots G'$ と相補的に記述することができる。この過程はどのように解釈すべきだろうか。回収過程 $F\cdots G'$ は商品化された貨幣請求権の使用価値を行使する債権者側の消費過程であった。逆に、返済過程は貨幣を請求される側、つまり債務を履行する債務者側の過程である。この債務の履行こそ返済あるいは弁済であって、そこでは貨幣は支払手段として機能する。支払手段とは定義上、債権債務関係を消滅させる手段のことであるから、ここでの貨幣は流通手段ではない。したがって債務者側から見てもこの過程はFの購買過程と見なすことはできない。ではどのような過程と見なすのが妥当なのだろうか。

返済過程は、債務を弁済するために利潤のうちから元本と利子を返済する過程であることから、この過程は定義上分配過程と見なすのが正しい。じっさい、マルクス自身が述べている通り、Bの手元に残る企業者利得とAに手渡す利子とは、「違った人格に分配される vertheilte 利潤の二つの分けまえ」(MEGA II/4.2, S. 447, K., III, S. 389)であり、「企業者利得と利子への利潤の分裂は同じ収入の分配 Vertheilung として現われる」(MEGA II/15, S. 854, K., III, S. 890)。そこでこの返済過程をタリーシステムと負の物質収支式を用いて記述してみよう。

タリーシステムを用いて返済過程を考えてみると、貸し手Aはタリーのstock側を手渡して請求権を行使し、借り手Bは貨幣を手渡して債務を履行する。この債権請求と債務履行は3つのステップを踏む。まずAは返済時期を迎えた一定期間後、タリーの債権側stockをもってBに返済を請求する。次にBは、債権側stockと自分の保持している債務側foilとを重ね合わせて

合致しているかどうかを確認する。最後に、合致が確認できれば請求金額通りの貨幣を A に返済する。

返済過程を物質取支式で記述してみると、まず、貸し手 A はタリーの stock 側を手渡すから債権の流出が起こり、借り手 B はそのタリーの stock 側を受け取るから債権の流入が起こる。債権の流出は式(3)の成分より $-f^-$ であり、債権の流入は式(4)の成分より ${}^Tf^+$ であるから、次の恒等式が成り立つ。

$$f^- \equiv {}^Tf^+ \quad \dots\dots(9)$$

つまり、貸し手が請求する債権は、借り手の受け取る債権と恒等的に等しい。これはタリーで言えば、運搬途中で破損が起きなければ必ず成り立つ。

次に、債権側と債務側との合致が確認できなければならない。これは流入してきた債権 ${}^Tf^+$ と、もともと負担していた債務 $-{}^Tf^\ominus$ が一致することを意味する。この結果、次式が成り立つ。

$$-\Delta{}^TF = -{}^Tf^\ominus + {}^Tf^+ = -100 + 100 = 0 \quad \dots\dots(10)$$

すなわち、債権の流入 ${}^Tf^+$ が、当初の債務 ${}^Tf^\ominus$ と合致していることが確認できる。この結果、負債の変化は $-\Delta{}^TF = 0$ となる。仮定より、負債そのものは $-\Delta{}^TF = 0$ となる。

最後に、債権債務の合致が確認できれば、借り手 B は請求 ${}^Tf^+$ に対して貨幣 G' を支払う²⁶⁾。貨幣の支払手段機能が発揮され、債権債務関係は消滅する。利潤からの利子の分配過程は、債権債務の消滅過程でもあることになる。

返済過程とは、したがって、債権債務関係の消滅過程であると同時に利潤からの利子の分配過程でもある過程の総体 $G' \dots -{}^TF$ のことである。この過程はいわゆる流過程ではない²⁷⁾。したがって表記するには「…」を用いるのが妥当である。返済過程についてもすべて記述することができた今、あとは借入から返済までのすべての運動過程を記述する作業が残っている。

2.3 負債を伴う資本の一般的定式

資本の一般的定式 $G - W - G'$ における期初の貨幣 G を負債によって調達した場合、その借入過程と返済過程の両方を表記した定式を、負債を伴う資本の一般的定式、あるいは単に負債の一般的定式と呼ぼう。既に確認した通り、借入過程は $-{}^TF - G$ 、返済過程は $G' \dots -{}^TF$ と表記するのが妥当である。だが、表記上、流通を示す記号「-」とマイナスを示す記号「-」とが区別しにくい。そこで以下では Weeks (2010) に倣って、流過程を示す記号「-」と流通以外の過程を示す記号「…」とを統合し、姿態変換を表す(二項関係の)記号として矢印「→」を導入しよう。これは例えば「 $A \rightarrow B$ 」ならば、「A は B に姿態変換する」と読む。以下では、生産・流通・分配・消費等の過程の区別は行わないことにする。

負債の一般的定式は次のように書ける。

$$-{}^TF \rightarrow G \rightarrow W \rightarrow G' \rightarrow -{}^TF$$

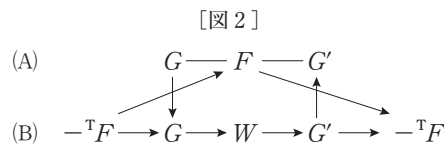
この負債の一般的定式 $-{}^TF \rightarrow G \rightarrow W \rightarrow G' \rightarrow -{}^TF$ は、マルクスが表現したそもそもの利子生み資本の運動形式 $G - G - W - G' - G'$ と極めて良く似ている。マルクスの利子生み資本では最

初の G は A の貸金だが、負債の一般的定式では最初の $-^T F$ は B の借金である。利子生み資本では最後の G' は A の回収だが、負債の一般的定式では最後の $-^T F$ は B の返済である。それらは一見すると同じ対象を異なる視点で見ているだけだが、実は着目している対象の性質は大いに異なる。一方の利子生み資本の運動形式は、貨幣という物質に目を奪われて資本の運動と物質の動きを同一視している。負債の一般的定式は、借り手の視点に定在し資本の運動にのみ焦点を合わせている。

その違いは、以下で見るように金貸資本的形式と負債の一般的定式を同時に表現することによって、より明らかになるだろう。本稿も終わりに近づいている。

3. 新しい金貸資本的形式と負債を伴う資本の一般的定式

金貸資本的形式と負債の一般的定式を同時に表現すると、図2のようになる。²⁸⁾



この図2と宇野の図1との間の決定的な違いは、図2では債権と債務が資本の運動の一契機として位置付けられているが、図1では債権と債務が消え去っていることである。もちろん、「消え去っている」という言い回しは、図2を眺めた後で言えることであって、図1だけをいくら見直しても債権債務が「消え去っている」とは認識できない(ないものは見えない)。だから、図1の「欠陥」は図2を見た後に初めて発見できる事柄である。

すなわち、図1と図2との対比から明らかになることは、マルクスも宇野も、資本の運動形式の一契機として債権と債務を位置付けることには失敗しているということだ。²⁹⁾ 宇野は金貸資本的形式の中に債権を位置付けることに失敗した。マルクスは利子生み資本の中に債務を位置付けることに失敗した。なぜマルクス=宇野は債権債務を正しく資本の運動形式に位置付けられなかったのだろうか。

債権と債務を資本の一契機として正しく位置付けられなかった原因を詮索してみると、それはおそらく債権と債務に自己価値がなく、自己価値のないものは資本ではないと考えていたからだ。自己価値があるのは「現実の資本」、すなわち現実の資本の循環運動の一契機としての資本であって、それ以外の「紙券 Papier」は、少なくとも資本の運動形式の一契機としては認められなかったわけだ。たしかに債権債務には自己価値がない。そのことは集計すればプラスマイナスゼロとなることに端的に表れている。³⁰⁾ だが、自己価値のないものが資本でないという判断には根拠がない。資本であるかどうかは、それが姿態変換の一契機として機能しているかどうかで判断すべきであって、「紙券 Papier」という姿態をまとうているかどうかはいつでもよい。マルクスは(そして宇野も)理論的な判断を誤ったと言うべきだろう。³¹⁾

マルクスはここから、債権債務概念を資本の運動形式に導入することなく、資本の運動における債権債務関係を記述するという絶望的に困難な分析の道歩んだ。その残響が、冒頭に紹介した夥しく濫立する資本概念群である。それはあたかも、天体の運行を説明するのに天動説が描いた無数の複雑な円に似ている。例えば、Aの期初のGは、果たして貨幣資本 Geldkapital か貨幣資本 moneyed capital か貸付資本か貸付可能資本か。AのFは、果たして擬制資本か貨幣資本 moneyed capital か利子生み資本か。これらの濫立する概念群は、債権債務概念に触れることなく債権債務概念に触れようとした必死の努力の現れである。だが、金貸資本的形式と負債の一般的定式を正しく定式化した今、濫立する概念群のほとんどを必要としない（必要なのは謂わば1つの単純な楕円であって無数の複雑な円ではない）。そもそも利子生み資本における2つのGを区別する必要があったのは、2番目のGが資本の一般的定式中の貨幣資本である一方、1番目のGが資本の循環運動を行わないと見なされていたため、「貨幣資本」以外の名称を必要としていたからである。だが今や1番目のGは金貸資本的形式 $G \rightarrow F \rightarrow G'$ のGであるから資本の循環運動を行う貨幣資本（あるいは単に貨幣）である。Fについては、単なる名称の定義問題である。とはいえ、もしもマルクスが $G \rightarrow F \rightarrow G'$ を正しく定式化していたならば、そして例えばFを端的に利子生み資本と呼んでいたならば（じっさいFは文字通り利子を生む）、マルクス経済学の状況は大いに変わっていたに違いない。

本稿はマルクスとは逆に、債権債務概念を資本の運動形式の一契機として位置付けた。これは一見するとマルクスの記述と背反するが、むしろ逆にマルクス以上にマルクスの資本概念に忠実な結果である。じっさい、 $G-G-W-G'-G'$ や $G-G'$ といった定式化は、姿態が変換していない部分を含むという意味で、資本の運動を正しく定式化したものではない。むしろマルクスの本来の資本の定式 formula（むしろ公式 formula）に背馳しているのは、そうした誤った定式化の方だ。債権と債務を資本の運動の一契機として正しく導入することによってのみ、金融活動を担う資本の運動を正しく定式化することができる。

こうして、資本の運動形式を構成する契機を拡張することで、資本の運動形式の分析可能領域は格段に広がるはずである。³²⁾

おわりに：理論的拡張可能性のスケルトン

もはや紙幅に余裕がない中で、最後に結論に代えて、本稿の理論的拡張可能性のスケルトンとして銀行業資本の運動形式について考察してみよう。³³⁾ 詳細な論証は省略する代わりに、理論的拡張の可能性の概略を捉えるためには有益である。

負債を伴う資本の一般的定式はすべての資本形式に当てはめることができるが、³⁴⁾ ここで最も興味深いのは負債の一般的定式に金貸資本的形式を適用することである。その形式は $-^T F \rightarrow G \rightarrow F \rightarrow G' \rightarrow -^T F$ と書ける。この運動形式が意味していることは、「貨幣を安く借りて高く貸す」である。すなわち、この運動主体は、借入過程 $-^T F \rightarrow G$ において黒字主体から貨幣Gを安く借り入れ、その貨幣を赤字主体に高く貸して利子を得る金貸資本的形式 $G \rightarrow F \rightarrow G'$ を行い、その運動によって得た利潤から返済過程 $G' \rightarrow -^T F$ において黒字主体に利子を返済してい

る。この運動形式を、したがって、銀行業資本 Banking capital の運動形式の一つの定式化と捉えることができるだろう。ただし注意を要するのは、この運動形式に登場する債権 F と債務 $-{}^T F$ は今までとは意味が異なる点だ。 $-{}^T F$ は銀行業資本の負担する債務 (もしも銀行手形があれば銀行手形債務) であるのに対し、 F は赤字主体の債務負担から生じた債権 (もしも差し入れられたのが手形ならば商業手形債権) である。そこで両者を区別するために、銀行業資本の債務を預金 Deposit 債務と呼び、それを $-{}^T D$ と書こう。

貨幣を「安く借りて高く貸す」、負債を伴う金貸資本的形式の運動を、銀行業資本の運動形式 1 と呼ぼう。それは次のように書ける。³⁵⁾

$$-{}^T D \rightarrow G \rightarrow F \rightarrow G' \rightarrow -{}^T D \quad \dots\dots (B1)$$

この運動形式 1 (以降 B1 と略記) では、預金が貸付を可能にする。安く借りた貨幣を高く貸し付ける。³⁶⁾これはポストケインジアン³⁷⁾の Verticalists とほぼ同じ銀行観である。だがもちろん、この見方は一面的である。銀行は、貨幣を借りて貨幣を貸すのではなく、自分が預金債務を負担することで創り出した貨幣請求権を譲渡し、他人が創り出した貨幣請求権を取得する。これは銀行の創出した貨幣請求権がいわゆる信用貨幣として流通することを意味している。このとき、この銀行は信用貨幣で債権を安く買い、その債権で高く回収するだろう。

信用貨幣で「安く高くて高く回収する」、信用貨幣を用いた金貸資本的形式の運動を、銀行業資本の運動形式 2 と呼ぼう。それは次のように書ける。

$$-{}^T D \rightarrow F \rightarrow -{}^T D' \quad \dots\dots (B2)$$

過程 $-{}^T D \rightarrow F$ は債務の貸付と呼ばれる貸付過程³⁸⁾、過程 $F \rightarrow -{}^T D'$ は (銀行手形であればいわゆる還流法則が妥当する) 回収過程である。もはやこの運動形式では貨幣 G の貸借を行わない。金貸資本的形式 $G \rightarrow F \dots G'$ の貨幣 G に代わって信用貨幣 $-{}^T D$ が運動の始点と終点を構成する。³⁹⁾

この運動形式 2 (以降 B2 と略記) では、貸付が預金を創出する。これはポストケインジアン⁴⁰⁾の Horizontalists と同じ銀行観である。だがもちろん、この見方もまた一面的である。というのも、B2 では貨幣 G との関連性が失われてしまっているからだ。貨幣との関連性を補足するためには、実質的には 2 つの方法しか残されていない。なお以下では中央銀行の存在を仮定し、銀行業資本の貨幣 G を準備金と同一視しておこう。

貨幣との関連を回復する 1 つ目の補足的方法は、自己の預金債務 $-{}^T D$ によって貨幣 G を借り入れる方法である。貨幣が引き出される可能性も考慮すると、貨幣との関連性を回復する補足的運動⁴¹⁾には、次のような運動形式が考えられる。

$$-{}^T D \rightarrow G \rightarrow -{}^T D \quad \dots\dots (B2-1)$$

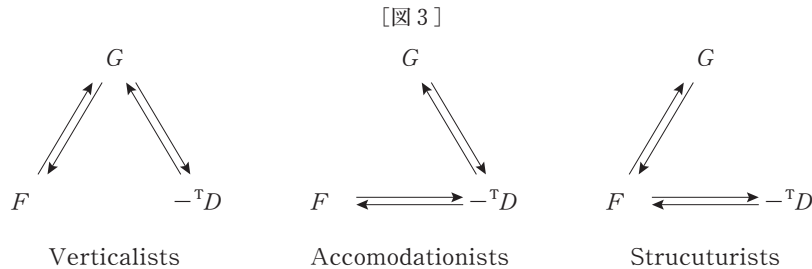
このような貨幣の確保の方法を認める Horizontalists を、いささかミスリーディングではあるが、Accommodationists の立場と名づけておこう。⁴²⁾Accommodationists はその名の通り、中央銀行が市中銀行の貸出増加に伴う準備金 G の需要増加に完全に適^{アコモデート}応すると想定している。借入過程 $-{}^T D \rightarrow G$ において中央銀行から準備金 G を借り入れ、これが預金引出である返済過程 $G \rightarrow -{}^T D$ を十分上回れば、銀行は拡張的に貸出を増やすことができるだろう。

貨幣との関連を回復する2つ目の補足的方法は、いわゆる短期金融市場で貨幣を調達する方法である。これは債権 F を短期金融市場で販売して貨幣 G を獲得する方法である⁴³⁾。中央銀行によるオペレーションの可能性も許容すると、2つ目の補足的運動は、次のような運動形式で書ける。

$$F \rightarrow G \rightarrow F \dots\dots (B2-2)$$

このような貨幣の確保の方法を認める Horizontalists を Structuralists の立場と名づけておこ⁴⁴⁾う。Structuralists の立場では、銀行は準備金 (ここでは G) を調達するための預金設定は行わない。中央銀行に債権を担保として提供するか短期金融市場で債権を販売するかして準備金 G を調達する。

以上、Verticalists, Accomodationists, Structuralists の立場を図示すると、図3のようになる。左から順に Verticalists (B1), Accomodationists (B2 と B2-1), Structuralists (B2 と B2-2) の立場を表現している。



3つの立場をまとめておこう。Verticalists の B1 は、図3では預金債務 $-TD$ から反時計回りに貨幣 G を経由して債権 F へと動き、そこから再び時計回りに預金債務 $-TD$ に復帰する循環を描く。Verticalists の B2 は、図3の中央・右側の2つの立場であり、いずれも三角形の底辺に位置する預金債務 $-TD$ と債権 F との間の循環として銀行業資本の運動を描いている。だが Accomodationists と Structuralists との間では補足的運動についての見解が分かれる。Accomodationists は預金債務 $-TD$ と貨幣 G との間の小循環 B2-1 によって貨幣を確保する。Structuralists は債権 F と貨幣 G との間の小循環 B2-2 によって貨幣を確保する。

さて、ここで問題は、銀行業資本の運動形式としていずれが正しいかである。正解は、いずれも正しくない、である。だが、模範解答を記述するには紙幅が尽きてしまった。

注

- 1) 邦訳は『マルクス資本論草稿集』第2巻755頁。
- 2) Žižek (1989), p.163, 邦訳 304-5頁。
- 3) もちろん B は $\text{£}15$ の利潤を得る。
- 4) 『資本論』からの引用は MEGA 版と MEW 版を並記する。引用の仕方については慣例に従った。訳文については各種『資本論』の翻訳版の他、大谷 (2016) を大いに参考にしたことを付記しておく。
- 5) なお、宇野の著作からの引用頁は以下すべて『宇野弘藏著作集』からのものである。
- 6) ただし、宇野自身もこの定式化を厳格に適用することには留保があったようである。例えば宇野 (1967-68, I, p. 255-259) 参照のこと。宇野派の中でも、この資本の定式化を厳格に運用することを

是とする者 (古くは日高 (1966) 参照) と否とする者 (例えば大内 (1981-82, p. 204-5) 参照) とに分かれている。だが、少なくとも利子生み資本を論じる宇野は、厳格運用是認派であった。

- 7) 宇野 (1959, p. 190)。
- 8) 以下の表記方法は小幡 (2009) に準じた。ただしここでは $u(G)$ は使用権ではなく貨幣の用益すなわち資金と定義されており、ここでの (宇野に準じた) 定義とは異なる。なお、 $u(G)$ の使用権の期間は 1 に正規化する。
- 9) このことは宇野の仮定が誤っていただけでなく、マルクスも同様に誤っていたことを意味している。それは、 $u(G)$ を「資金としての貨幣」ではなく「資本としての貨幣」と置き換えても証明が成り立つことから明らかである。
- 10) 貨幣請求権は、日本の民法典では金銭債権 (402条) に該当するが、実質的には消費貸借契約 (587条) に該当する。ただし、金銭債権は会計上、預金、受取手形、売掛金、貸付金等幅広い範囲を含む。具体的には、貸し手 A と借り手 B が金銭消費貸借契約を結び、B が「金銭消費貸借契約書」を差し入れて A が貨幣を貸す「証書貸付」が典型例である。
- 11) 代表的な個所は以下の通り。

商品は、貨幣と引き換えにではなく、書面での一定期日の支払約束と引き換えに売られるのであって、この支払約束をわれわれは手形という一般的範疇のもとに包括することができる (MEGAII/4.2, S. 469, K., III, S. 413)

引用部分の手形を貨幣請求権が券面化したものだと解釈すれば、資本が商品から貨幣請求権に姿態変換したと解釈できる。

- 12) 宇野派の論者としては、日高 (1966)、武井 (1972)、やや視角は異なるが Sekine (1984-86/2021, 1997)。宇野派以外にも (まったく網羅的ではないが)、高田 (1979, 1980)、八木 (2006)、角田 (2011) などを挙げるができる。ただし、「貨幣請求権」という言葉の代わりに、順に、「債権」「手形」「non-cash」, 「貨幣債権」「債券」「債権 = 債務」などが用いられている (論者によって、記号を用いた者もいれば用いなかった者もいる)。語句や記号は統一されていないものの、いずれも考え方は同一である。
- 13) 反対側の視点に立てば、B が A に対して貨幣請求権を売って貨幣を取得したと考えることもできる。
- 14) とはいえ、マルクスが貨幣請求権に (価格ならともかく) 価値があると判断したかどうかはいささか微妙な問題を含む。少なくとも厳格な労働価値説の観点から考えれば、労働生産物でないものに価値を認めることはないからだ。では宇野の枠組みではどうか。宇野流通論における価値の定義のうち、交換力があるかどうかを価値のメルクマールにすれば、おそらく貨幣請求権に価値はあると判断できるだろう。宇野自身がどう答えるかどうかは別としても。
- 15) この発想はマルクスとは真逆である。マルクスは貸付を「貨幣の貸し手は自分の貨幣を売る」過程とも見なしていた (MEGA II/4.2, S. 462, K., III, S. 405)。しかし、マルクスに反して逆が正しい。貨幣の貸し手は自分の貨幣で貨幣請求権を買う。貸しは売りではない。貸しは買いである。貨幣は買うことしかしない。
- 16) 金融資産という言葉は外延が広く、日常的な用語法としては現金預金も含んでしまう。だがもちろん、ここでは貨幣 G は F に含めない。したがって F を金銭債権と呼ぶのが妥当だろう。
- 17) 金貸資本的形式が類同的なのはむしろ、『資本論』第 2 巻第 2 編第 17 章「剰余価値の流通」の中で言及されている「貴金属生産に投下された資本の循環」 $G - W \cdots P \cdots G'$ である (MEGA II/13, S. 303, K., II, S. 328)。よりはっきりと類比を際立たせるためには、この資本循環を $G - W \cdots G'$ あるいは $G - P \cdots G'$ と書き直せばよいだろう。貴金属部門が金の実質的な使用価値の消費によって貨幣 G を獲得するのに対し、金貸資本的形式は債権の追加的な使用価値の消費によって貨幣 G を獲得する。
- 18) じっさい、このように借入過程を記述している論者もいる。武井 (1972)、高田 (1979, 80) 参照。

- 19) 以下の記述は Stone (1975) を大いに参照した。
- 20) もっとも、腐食や虫食いからは免れないのではあるが。
- 21) このようなわけで、イングランド財務府作成の Stock と Foil が一揃いで存在する可能性は文字通り灰燼と化してしまった。だが奇跡的に、国会議事堂の焼け跡の中から一揃いの Stock と Foil が一組だけ救出され、それは現在、イングランド銀行博物館の倉庫に所蔵されている。貴重資料の提示と共にご教示いただいたイングランド銀行博物館収集主任の Ellie Paton 氏に記して感謝する。
- 22) 物質収支については、例えば Himmelblau and Riggs (2012, p.104-5) を参照のこと (残念ながら最新の第9版では該当箇所は削除されてしまった)。なお、本節は佐藤 (2016, 2017) を多く踏まえている。
- 23) 債務を消滅量と呼ぶのは違和感が生じるかもしれないが、債務は債権を帳消しに (マイナスに) するので、たしかに債務は債権を「消滅させる」量である。
- 24) 負債の場合、流出が負債を増加させる。なくなることが増えることだという逆説めいた結果はいくら強調してもしすぎることはない。後に見るように、債権の流出は、対価として貨幣の流入を引き起こす。債権の流出と貨幣の流入は、貸借対照表上では資産と負債の両建ての増加をもたらす。ところで、この現象を記述している2つの理論について (いささか長くなるが) 言及しておこう。1つは現代貨幣理論 MMT である。MMT は信用創造について、「借り手の借用書を銀行が受け取った時に創造される銀行預金はすべて、銀行のキーストロックに由来する」と述べている (Wray (2015), p. 60, 邦訳 137頁)。現象の記述としては異論ないが、因果の記述としては (キーストロックがなぜ信用を創造するのかについては) 何も有益な情報がない。これは MMT が債権債務の生産と流通についての考察を放棄した結果であると言えよう。多くのポストケインジアン理論も大同小異である (例えば Lovoie (2014, Chap. 4) 参照)。もう1つ、本節が書かれる上で最も刺激を受けた、手形・小切手法における「二段階創造説」について触れておこう (例えば前田 (1999) 参照)。二段階創造説によれば、手形行為は手形債務負担行為と手形権利移転行為の二段階からなる。手形債務負担行為では、手形の作成によって手形債務を発生させると同時に、それに対応する権利を手形に結合させる。手形権利移転行為では、手形に結合されている権利を相手方に譲渡する。本節で言えば、手形はタリーと同じであり、手形債務負担行為では、手形=タリーの作成により債務 Tf^{\ominus} と債権 Tf^{\oplus} を「生産」する。手形権利移転行為では、手形=タリーを譲渡 Tf^{-} することで「流通」する。したがって、二段階創造説は本稿とともに、(木材と紙券の違いはあれど) 債権と債務の生産と流通を扱っている唯二の理論である。ただし (これは極めて重要な但し書きだが) 二段階創造説の手形上の権利は、文脈によっては $+Tf^{\oplus}$ として生じるのではなく、債務者の債権 F における債権の発生 $+f^{\oplus}$ と考えられている節がある。つまり、二段階創造説では手形債務負担行為の段階で貸借対照表が両建てで増えると考えられているようにも読める。そうした曖昧さはあるが、二段階創造説は本節の議論と並んで、債権債務の生産と流通を考察した数少ない理論である。
- 25) 式(8)から明らかなように、左上添字に「T」は、したがって、右上添字のマイナス記号をプラスに反転させる演算子の役割を果たしている。後に見る式(9)のように、プラスをマイナスに反転させることもまた正しい。
- 26) 支払金額についてはやや注意を要するかもしれない。借り手は £100 を借り入れ £105 を返済している。このとき、金銭債務という商品は、£100 の価値をもち、その請求権の行使によって £105 を取得できる使用価値をもつ。ここで恒等式より $Tf^{\ominus} = Tf^{\oplus} = Tf^{-} = Tf^{+}$ が成り立つため、それらはすべて £100 である。他方、支払金額は $G' = 105$ である。一見すると、£100 と £105 との間の不等価交換のように見えるが、それは商品に元値と売値の2つの価格があるのと同じである。
- 27) 一見、返済過程 $G' \cdots -Tf$ については、満期になった債権を借り手が「買い取る」という表現も可能な印象を与えるかもしれない。だがこれは語の濫用である。債権債務関係は片務的であって、売買関係のような双務的な関係をもたない。つまり借り手は貨幣の移転請求を断れない (請求を履行しなければ、貸し手の貨幣請求権が損害賠償請求権に姿態変換することになる)。このことは、借り手

が債権の買い手ではないことを意味している (買い手であれば、気に入らない商品を買わなくても済むはずだ)。したがって、「買い取る」という表現が指し示している現象には、貨幣と債権が双方向的に移転するという以上の共通点を持たない。

- 28) 姿態変換の転換にも主体間の移転にも矢印を使っているが、同一行内の右方向矢印は転換、異なる行間の斜め方向の矢印は移転であるから、両者が混同されることはないだろう。
- 29) 本稿の立場から先行研究を振り返ってみると、満点答案は1つもないが、及第点は武井 (1972) と高田 (1979) である。両者とも債権を正確に扱っているが、残念ながら債務については債権と未分離であって正しく定式化されていない。
- 30) 冒頭で言及した Žižek の「それ自体は存在せず、一連の効果の中のみ現存するが、つねに歪められ、置き換えられて現れる、一つの原因である」という現実界の対象の性質は、奇妙なまでに債権債務の性質に似ている。それは初期時点では0であって、それ自体としては存在しないが、たしかに一連の取引の中では存在する。しかも、債権は現実の資本の価値とは違った価値評価を受けることで、「つねに歪められ、置き換えられて現れる」。この歪曲や置換は、金融化現象が叫ばれて久しい21世紀では、むしろ日常的に見慣れた光景になっているのではないか。
- 31) さらに理由として、債権 F を位置付けることに比べて、債務 $-^T F$ を正しく位置付けることが著しく困難であることも付け加えて良いだろう。じっさい、『負債論』の名を冠した Graeber (2012) でさえも、べつだん負債を正しく位置付けているわけではない。Graeber (2012, p. 120, 邦訳 180 頁) は「負債と呼ばれるものの本質」について、「平等な者同士のあいだで (少なくとも一時のことながら) 平等ではないとする合意」が極めて重要であると評している。それは負債と言うよりも正確には債権債務関係であるが、その債権債務関係が債務者の債務負担行為を通じて債権が創出され、債権移転行為によって債権者に債権が譲渡されるメカニズムを記述しているわけではない。結果的には「人が王であるのは、ただ、他の人々が彼にたいして臣下として振る舞うからでしかない」(MEGAII/10, S. 58, K., I, S. 72) というマルクスの記述の方が、よほど債権者 (王) と債務者 (臣下) との関係を正確に記述する上でのヒントを与えてくれるのではないだろうか。
- 32) じっさいの分析は不完全ながらも Satoh (2012a, 2012b) を参照のこと。
- 33) 以下で提出されるのは類型論であって、類型間の理論的導出は考慮されない。理論的導出については、もう少し信用についての本格的な考察が必要であることを付記しておく。なお、大谷 (2016) は、『資本論』三巻五編の理論的分析を、第21~24章の「利子生み資本の概念的把握」のパートと、第25章以降の「信用制度化の利子生み資本の分析」のパートに分割している。本稿では、これまでのパートが前者、これからのパートが後者に対応する。
- 34) 例えばじっさい、Itoh and Lapavitsas (1999, p. 63) は、図1の資本の一般的定式の代わりに産業資本的形式を代入している。こうした作業を図2に対しても行うことができる。
- 35) 日高 (1968) は、銀行業資本の運動形式は、そもそも形式として示せないという立場をとった。端的に誤りだろう。他方、示せる立場の間で様々な形式の提案が国内外でなされてきたが、言及に値するのは唯一、塚本 (1980) のみである。
- 36) じっさい、ここで銀行業資本の (粗) 利潤率 r_B を求めてみよう。銀行資本を K_B とすると、それは資本循環に拘束されている資本ストックだから $K_B \equiv G + F - ^T D$ である。貸出利率を i_F 、借入利率を i_D とすると、次式を得る。

$$r_B = \frac{i_F F - i_D ^T D}{G + F - ^T D}$$

- 37) Verticalists については Moore (1988) 参照。ポストケインジアンは (ケインジアンなので) マクロ的な分析視角から銀行行動を記述する。利率と貨幣量の平面で、銀行行動を前提とした貨幣供給量を垂直 vertical とみるのが Verticalists、水平 horizontal とみるのが Horizontalists である。Verticalists は中央銀行が (ベースマネーを決定することで) マネーサプライを決定できると考える (銀行が影響を及ぼすことができるのはせいぜい利率水準である)。Horizontalists は銀行貸出によってマネーサ

プライが決定されるので、中央銀行はそれに見合ったベースマネーを供給せざるを得ないと考える。本稿はケインジアンと異なり、銀行行動を資本の運動形式から記述する。そこでの銀行行動は「預金が出金を決める」Verticalistsか「貸出が預金を決める」Horizontalistsかの観点から記述される。

- 38) 川合 (1981) 参照。
- 39) 銀行業資本の運動形式の真理に最も肉薄した塚本 (1980) は、銀行業資本の運動形式を論ずる図の中で (現金による回収を仮定した上で、本稿の記号法を使えば) $-^T D \rightarrow F \rightarrow G$ と記述している (と好意的に解釈できる)。これは凡百の貨幣信用論よりも遥かに優れた定式である。さらに塚本 (1980) 本文の記述では、これに加えて銀行業資本の運動形式が $-^T D \rightarrow F \rightarrow G \rightarrow -^T D$ となる可能性を指摘している (ようにも読める)。じつは本稿が最終的に主張したい銀行業資本の運動形式はこの $-^T D \rightarrow F \rightarrow G \rightarrow -^T D$ である。Satoh (2012b) では不完全ながらこの形式を提案しておいた。
- 40) たしかに B2 だけ見ると貨幣 G なしに信用創造が行われており、あたかも銀行には貨幣 G がいないかのような印象を与える。だが銀行資本の定義式は $K_B \equiv G + F - ^T D$ であるから、 $K_B = G$ が偶然成立している場合を除き、銀行には貨幣がある (もしも貨幣不要論者がいたとしたら、それは恒等的に $K_B \equiv G$ を仮定した上で銀行資本と貨幣を貸借対照表からオフバランスしているだけである)。後に見る Accommodationists と Structuralists は、不可視化されている貨幣 G とのつながりを明示化する試みだと考えることができる。
- 41) 本文では「補足的方法」と概括しているが、これは歴とした貨幣取扱業務であるから、この形式によって利潤が得られるならば、貨幣取扱資本の運動形式と呼んでも構わない。この運動形式を通じて、貨幣の受領と支払を媒介とする信用貨幣が生成する。貨幣取扱業務と預金銀行については楊枝 (1988) を参照のこと。
- 42) 後に見るように、本項では Horizontalists には Accommodationists と Structuralists の 2 種類の間がある人と整理している。この整理は一般的な Horizontalists を Accommodationists と同一人物視する見解とは異なっている。
- 43) 実際には現金を取得するよりもむしろ準備金の勘定の金額が増えるのではあるが。
- 44) 例えば Palley (1996, 2013) 参照。

参考文献

- 宇野弘蔵 (1948) 「通貨と資金」『インフレーション・統計発達史』第一出版 (『宇野弘蔵著作集第 5 巻』岩波書店, 1974年)
- 宇野弘蔵 (1950-52) 『経済原論』岩波書店 (『宇野弘蔵著作集』第 1 巻, 岩波書店, 1973年)
- 宇野弘蔵 (1959) 『マルクス経済学原理論の研究』岩波書店 (『宇野弘蔵著作集第 4 巻』岩波書店, 1974年)
- 宇野弘蔵 (1962) 『経済学方法論』東京大学出版会 (『宇野弘蔵著作集第 9 巻』岩波書店, 1974年)
- 宇野弘蔵編 (1967-68) 『資本論研究 I-V』筑摩書房
- 大内力 (1981-82) 『経済原論上-下』 (『大内力経済学大系第 2-3 巻』) 東京大学出版会
- 大谷禎之介 (2016) 『マルクスの利子生み資本論第 1-4 巻』桜井書店
- 小幡道昭 (2009) 『経済原論: 基礎と演習』東京大学出版会
- 角田修一 (2011) 『概説社会経済学』文理閣
- 川合一郎 (1981) 『資本と信用』『川合一郎著作集第 2 巻』有斐閣
- 佐藤隆 (2016) 「資本の一般的定式と 3 つの資本の個別的形式」『大分大学経済論集』67(4-5), pp. 1-30
- 佐藤隆 (2017) 「資本の循環定式と複式簿記の規則」『大分大学経済論集』68(5-6), pp. 1-29
- 高田太久吉 (1979) 「信用貨幣の成立 (その一) 単純流通と信用の一般的形態」『商学論纂』中央大学商学研究会編, 21(4), p. 85-115
- 高田太久吉 (1980) 「信用貨幣の成立 (その二) 商業手形とその流通」『商学論纂』中央大学商学研究会編, 21(5・6), p. 125-159

- 武井邦夫 (1972) 『利子生み資本の理論』時潮社
- 塚本健 (1980) 『経済学原論』東京大学出版会
- 日高普 (1966) 『商業信用と銀行信用』青木書店
- 日高普 (1968) 『銀行資本の理論』東京大学出版会
- 前田庸 (1999) 『手形法・小切手法』有斐閣
- 八木紀一郎 (2006) 『社会経済学：資本主義を知る』名古屋大学出版会
- 楊枝嗣朗 (1988) 『貨幣・信用・中央銀行支払決済システムの成立』同文館
- Ehara, Kei. (2022), *Japanese Discourses on the Marxian Theory of Finance*, Palgrave Macmillan.
- Graeber, David. (2011), *Debt: the first 5,000 years*, Melville House. (酒井隆史監訳・高祖岩三郎訳 『負債論：貨幣と暴力の5000年』以文社, 2016年)
- Himmelblau, D. M. and J. B. Riggs. (2012), *Basic Principles and Calculations in Chemical Engineering*, 8th Edition, Pearson.
- Itoh, Makoto and Costas Lapavistas. (1999), *Political Economy of Money and Finance*. Macmillan.
- Lavoie, Marc. (2014), *Post-Keynesian Economics: New Foundations*, E. Elgar.
- Moore, Basil J. (1988), *Horizontalists and Verticalists: the Macroeconomics of Credit Money*, Cambridge University Press.
- Palley, Thomas I. (1996), "Accommodationism versus Structuralism: Time for an Accommodation," *Journal of Post Keynesian Economics*, 18(4), pp. 585-594.
- Palley, Thomas I. (2013), "Horizontalists, Verticalists, and Structuralists: the Theory of Endogenous Money Reassessed," *Review of Keynesian Economics*, 1(4), pp. 406-424.
- Satoh, Takashi. (2012a), "Capital Inside and Out: The Drive to Internalize," *Journal of International Economic Studies*, 26, pp. 1-13.
- Satoh, Takashi. (2012b), "The Mathematical Marxian Theory of Capital Accumulation and the Post-Keynesian Theory of Monetary Circuit: A Synthesis," Joint conference of the AHE, IIPPE and FAPE, available at https://www.hetecon.net/wp-content/uploads/2019/12/SATOH_The_Mathematical_Marxian_Theory_of_Capital_Accumulation.pdf
- Sekine, Thomas T. (1984-86), *The Dialectics of Capital: A Study of the Inner Logic of Capitalism* vol. 1-2, Yushindo, (Haymarket Books, 2021).
- Sekine, Thomas T. (1997), *An Outline of the Dialectic of Capital* vol. 1-2, Macmillan Press.
- Stone, Williard. E. (1975), "The Tally: An Ancient Accounting Instrument," *Abacus*, 11, pp. 49-57.
- Weeks, John. (2010), *Capital, Exploitation and Economic Crisis*, Routledge.
- Wray, L. Randall. (2015), *Modern Money Theory: A Primer on Macroeconomics for Sovereign Monetary Systems*, 2nd ed., Palgrave Macmillan (島倉原監訳・鈴木正徳訳『MMT 現代貨幣理論入門』東洋経済新報社, 2019年).
- Žižek, Slavoj. (1989), *The Sublime Object of Ideology*, Verso (鈴木晶訳『イデオロギーの崇高な対象』河出文庫, 2015年).

A Novel Formulation of Money-Lending Capital and the General Formula of Capital with Debt

Abstract:

This paper seeks to reconstruct a novel form of money-lending capital and the general formula for capital accompanied by debt through a re-examination of the concept of interest-bearing capital. From the vantage point of capital's movement form, we systematically organize and analyze the concept associated with interest-bearing capital. In the initial section, we articulate a new form of money-lending capital. Contrasting with Marx's delineation of interest-bearing capital, represented as $G - G - W - G' - G'$, Uno restructures it considering the metamorphic movement of capital, bifurcating it into the formula for money-lending capital and the general formula of capital. However, the form of money-lending capital, denoted as $G \cdots G'$, fails to undergo the essential metamorphosis, making it an insufficient representation of capital's motion. This redefined form of money-lending capital progresses from money to monetary claims, culminating in a more monetary amount. In the subsequent section, the paper delves into the general formula for capital intertwined with debt. Debt originates in the borrowing phase, wherein the borrower establishes a creditor-debtor relationship and sells the claims. This debt then vanishes in the repayment phase as the money is reimbursed and the claims are reverted. The general formula for capital with debt undergoes movement from the borrowing process, where it transitions from debt to money, and concludes its movement in the repayment process, where it reverts from money back to debt. In conclusion, this paper emphasizes the formula for banking capital as a potential theoretical extension, discussing its implications and significance in the broader economic context.